

いま、なぜ、どのように沖縄現代史を書くか —櫻澤誠著『沖縄現代史』との対話

松田ヒロ子

現代史とは、私たちが生きている「今」をその起源までさかのぼって、成り立ちとそれからの変化を跡づけることで、これからの行動のための一般的な指針を導き出すことを基本的課題とする分野です。(溪内謙『現代史を学ぶ』(岩波新書, 1995年))

はじめに

沖縄に生きる人々が経験してきた苦難とその要因を、それらについて情報を得る機会も乏しく、また主体的に知ろうともしない日本本土在住の人たちに学んでもらうために、大学の講義は非常に有用だと思われる。私が日本の大学で非常勤講師、そして専任教員として講義を担当するようになってから、何回か沖縄近現代史をテーマにした授業を行った。「アジアの歴史」や「国際社会論」というようなタイトルのつきたいわゆる教養科目で、沖縄に焦点を当てることによって、日本やアジア・太平洋の歴史を読み解くような講義を行ったのである。

だが実際に開講して気づいたのは、琉球・沖縄史に関する知識をほとんど持たない大学生向けの、教科書として代用できるような一般書が少ないという現実である。大学の講義で使用するテキストは、意外に選ぶのが難しい。経済的に厳しい生活を強いられている学生もいるなか、高額な本を何冊も買わせるのは躊躇われる。なるべく安価で、授業の予習復習に必要な最低限の知識が網羅されていて、多様な学生のニーズに応えられる・・・そんな一冊はなかなか見当たらない。

著者の櫻澤誠氏は2016年現在大阪教育大学に専任教員として勤務しているが、本書が出版された頃は、関西にある複数の大学で教壇に立っていた。私が初めて本書を手にとった時、もしかして櫻澤氏は私と同じような悩みを抱えていたのかもしれない、という考えが頭をよぎった。だが無論、本書は大学の講義用テキストとしての使用だけを目的に出版されたものではない。新書というかたちで多様な読者によって広く読まれることを念頭に書かれた一般書としてどのような特徴をもつのか、過去に同じように戦後沖縄史を主題として出版された新書版と比較することによって、それを浮き彫りにしたい。

沖縄現代史のメルクマークを問う

そもそも、歴史学に分類される出版物のなかで「現代史」をタイトルに掲げた著作というのは意外に少ない。19世紀末以降の特定の国や地域をあつかった書物で「近現代史」というタイトルがつけられるものは多いが、「現代史」は稀である。そのなかでも「現代史」を掲げた出版

物は、著者が同時代的に経験している「問題」や「課題」の起源を追究するという問題意識が強く表れる傾向にある。1996年に初版が出版された新崎盛暉『沖縄現代史』（岩波書店、新版は2005年）は、その典型ともいえるような著作である。「あとがき」のなかで新崎氏は次のように述べている。

米軍支配下においても復帰後も、沖縄の歴史の基軸にあるものは、日米安保体制と沖縄民衆との闘いであった。そのことがはっきりと実感できたのは、1995年秋以降の闘いの過程においてであった。ようやく、復帰後沖縄の全体像が見えてきたのである。(p.235)

すなわち、新崎氏にとっての「問題」とは、沖縄における米軍基地の存在であり、それを可能にしている日米安保体制とそれに対抗する沖縄民衆の闘いである。そして沖縄現代史をその「問題」の歴史だと考えるからこそ、本書の構成も安保体制とそれに対抗する沖縄民衆の闘いの変遷によって時代が区分され、章立てがなされている。

新崎氏のこうした沖縄現代史観は、1995年に初めて生まれたわけではない。『沖縄現代史』刊行にから遡ること20年前に、新崎氏は故・中野好夫氏と共著で『沖縄戦後史』（1976年、岩波書店）を発表している。そこで米軍占領の開始から日本「復帰」までの歴史を次のように総括している。

沖縄戦後史は、沖縄占領米軍の支配確立によってはじまり、日米両国間の政治的取引によって、沖縄が日本に返還された（復帰した）ことによって終る。それは、第二次世界大戦の終了からベトナム戦争の終結にいたる世界史的な流れと密接な関係をもちながら展開されてきた (p.4)

つまり新崎氏は、1995年の一連の出来事を沖縄で経験しながら、戦後沖縄の歴史を貫く基軸が米軍統治下の頃と一向に変わっていないことを確認したのである。そして新崎氏の戦後沖縄史に対するこのような見方は、沖縄県内でも県外でも一定の支持を得てきたといえるだろう。

一方で、新崎氏が『沖縄現代史』の初版を発表してから20年経過した2015年に同じタイトルの著作を発表した櫻澤誠氏は沖縄の「今」をどのように捉えているのだろうか。櫻澤氏は「まえがき」のなかで次のように述べている。

14年2月、「オール沖縄」を掲げた翁長雄志が新たに県知事に就任した。いまだに大きい保革対立の側面と、超党派での「オール沖縄」としての側面をどう理解したらいいのか。その複雑に絡み合った糸を解きほぐすためには、沖縄の保革対立が形成されてきた過程、そして「オール沖縄」を可能にしている歴史認識や基地・経済認識が創られてきた過程を知る必要がある。(まえがき・iv-v)

前述した通り、新崎盛暉氏の『沖縄戦後史』（1976年）は沖縄県の日本への「復帰」を沖縄史のひとつのメルクマークとして捉えてそこから過去を遡った。そして『沖縄現代史』（1995年）は

いま、なぜ、どのように沖縄現代史を書くか—櫻澤誠著『沖縄現代史』との対話（松田）

米兵による少女暴行事件とその後の沖縄の大衆運動の興隆をメルクマークとして、そこから過去を遡ったのだった。それと対比するなら、2015年に刊行された櫻澤誠氏による『沖縄現代史』は「オール沖縄」をひとつのメルクマークとして捉えているように読み取れる。

だが、「オール沖縄」は沖縄の日本「復帰」や1995年の大衆運動の興隆と同じようなインパクトをもつ歴史的事件だといえるのだろうか。もし「オール沖縄」を沖縄にとっての歴史的时刻だと考えるのなら、櫻澤氏が述べるように「沖縄の保革対立が形成されてきた過程、そして『オール沖縄』を可能にしている歴史認識や基地・経済認識が創られてきた過程を知ること」は、たしかに重要な現代史的課題であるといえるだろう。しかしながら私は「オール沖縄」が、様々な立場の違いを越えて多くの人にとって大きな意味をもつような事件であるとは思えないし、将来そのような事件として人びとの記憶に刻まれるであろうとは予想しない。だからなぜ今、沖縄現代史の課題として「オール沖縄」の成り立ちの過程や起源が問われなくてはならないのか、問題意識を共有しえないのである。

それは、シンポジウムのテーマである「いま、なぜ、どのように沖縄現代史を書くか」という問いなのかもしれない。新崎盛暉氏にとっての「いま」、「なぜ」、「どのように」沖縄現代史を書くかという問いに対する答えは、著作を発表する度にきわめて明快に述べられている。彼が描く沖縄現代史の「どのように」という部分について賛同しない読者は多くいるだろう。だが「いま」「なぜ」沖縄現代史を著して世に問わなくてはならないのか、という問題意識については、多くの人々が共感しうる部分ではないだろうか。一方で、櫻澤氏の『沖縄現代史』からは、著者が沖縄の「いま」をどのように捉えているのかが見えにくい。それゆえ、それと有機的に連関するはずである、「なぜ」沖縄現代史が書かれるべきなのか、「どのように」それは記述されるべきだと著者が考えているのか、読み取ることが難しかった。

突き詰めるところ、それは「現代史」とは何か、そして歴史研究者とはどのように現在進行形の状況に関わり、何のために「現代史」を著し、どのようにそれを記述し書物というかたちで世に発表するのか、といういわば職業的アイデンティティに関わる問題なのかもしれない。シンポジウムではそのテーマについて正面から議論したかったが、櫻澤氏とそれについて意見交換することができなかったのは残念だった。

どのように沖縄現代史を書くのか：歴史学の空間論的展開と沖縄

櫻澤氏の著作のもうひとつの特徴は、沖縄現代史を沖縄県という空間範囲の内部で起こった出来事にはほぼ限定して記述している点である。それは日本における日本史学の手法としては標準的といえるのかもしれない。大雑把に言えば、日本国内の「日本史」という分野は、「日本」を除いた「西洋史」と「東洋史」という近接学問分野と棲み分けることによって成立してきたからである。しかしながら「琉球史」と「沖縄史」は、これまでそうした「日本史」研究とは異なる枠組みで記述がなされてきた。そもそも、19世紀前半まで中国の朝貢国として独自の政治・経済・文化体制を築いてきた琉球王国の歴史を、「日本史」と同じ方法で記述しえないことはいうまでもない。近現代沖縄の歴史も「日本史」分野ではなく「東アジア史」や「世界史」の文脈で語られることは珍しいことではなかった。

その代表例が新崎盛暉氏の一連の沖縄現代史研究である。1976年には、戦後沖縄の歴史が「第二次世界大戦の終了からベトナム戦争の終結にいたる世界史的な流れと密接な関係(p.4)」を持ってきたと主張し、1996年には「沖縄の歴史の基軸にあるものは、日米安保体制と沖縄民衆との闘い(p.235)」であると断言する新崎氏は、沖縄現代史を世界史的な流れの中に位置づけようという姿勢が明確である。無論、新崎氏の世界史や沖縄史理解に対しては異論を唱える者も多くあろう。だが、その歴史記述の方法は、今いちど問い直される価値があると思われる。すなわち今日の沖縄現代史研究の課題とは、新崎氏の提示した「日米安保体制—沖縄民衆の抵抗」とは異なる世界史的ビジョンを提示し、そこに沖縄現代史を位置づけることであって、米軍基地をめぐる政治や経済を沖縄県という地理的範囲に限定して論じることではないのではなかろうか。近年、日本の歴史学においても、西洋史—日本史—東洋史というパラダイムを見直し、これまで自明とされてきた空間枠組みや地理的境界を批判的に捉え直しながらいかに歴史を再構築するかが問われてきている。そうした研究動向をふまえて、本書は、桜澤氏が第二次世界大戦から今日に至るまでの世界史の歩みをどのように捉え、そこに現代沖縄史をどう位置づけるのか、もう少し明示しても良かったのではないだろうか。あえて沖縄現代史を「沖縄」という空間的範囲に限定して論じることの意義が私には読み取れなかった。

おわりに

「沖縄に折り畳まれた複数の空間性——いま、なぜ、どのように沖縄現代史を書くか」というシンポジウムのテーマに引きつけるあまりに、無いものねだりばかり述べてしまったかもしれない。異論や要望はあったとしても、本書の価値が損なわれるものではないことはいままでもない。「情報化社会」という言葉はもはや使い古されてしまった感があるが、インターネットの普及と大衆化によって、私たちはこれまでに無いほど多くの情報に囲まれて生活している。だが日本本土に住む多くの人たちは、過去に無いほどに沖縄に関する情報を目にしながらい、「沖縄」に関する全体像を思い描くことができず、複雑かつ重要な問題を掘り下げて思考することが難しいと感じているようだ。Twitterに典型的に見られるように、インターネットで大量に生産され、発信される情報は断片的で流動的である。それらの情報を整理するための基本的な枠組みや軸をもっていない人にとっては、それらの情報はただ一時的に消費されるだけにとどまり、その情報を利用して他者と議論し、問題を解明し、解決に向けて行動するまで至ることはない。だからこそ、日々変わり続ける沖縄の現在を読み解くための、枠組みと基軸の提示を試みた本書は、多くの人々に歓迎されるのであり、今後も長く読み継がれていくことになるだろう。

参考文献

- 新崎盛暉(1996)『沖縄現代史』岩波新書
- 中野好夫・新崎盛暉(1976)『沖縄戦後史』岩波新書
- 桜澤誠(2015)『沖縄現代史——米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』中公新書
- 溪内謙(1995)『現代史を学ぶ』岩波書店